

夕方に見える彗星は「宵の明星（金星）」や「三日月」の動きに似ています。物理的な距離も、天球上の離角（視角度）の太陽に近いからです。しかし、太陽が沈んでくれないと彗星は見えません。しかも太陽が沈んで1時間ほどたってやっと見え始めても、太陽を追いかけるように沈んでしまいます。彗星の撮影は「時間との勝負」なのです。

地平線に近い…つまり沈む寸前の彗星は、地上の風景と一緒に写せることがあります。いわば「情景的な彗星写真」です。今回使った天体写真儀「Seestar（シースター）」は、もともと星雲や星団を主な被写体として設計されているので、視野（写せる範囲）がとても狭いのが特徴です。画角に、やっと地上の風景が入ってきても、あっという間に彗星のほうで沈んでしまうのです。

この日私は、高崎市郊外の田んぼの真ん中で撮影していました。西側には低い丘陵があり、稜線にはモミの木のような樹容の針葉樹が並んでいます。その針葉樹のシルエットに彗星が沈めば、なかなか良い構図になるな、

と思っていました。懸念は、稜線にある送電線です。心配していた通り、彗星は送電線の鉄塔すれすれをかすめていきました。「チッ！」と思いましたが、写った写真を見て「オッ！」と思いました。

ちょうど送電線の「碍子（がいし）」と電線がうまく写りこんでいます。自然物ではないですが、「彗星とヒトの営み」が一緒に写っている写真はあまり撮ったことがないので、非常に面白い写真になったと満足しました。



「レモン彗星と送電線」

2025,11,-3/18:08

高崎市倉渕三ノ倉

撮影；C.Tanaka